
新潟青陵大学短期大学部 入学試験問題集

2021-2023

Contents

- 2023 年度 小論文問題 P.1
- 2022 年度 小論文問題 P.4
- 2021 年度 小論文問題 P.7

※解答例は掲載していませんのでご了承ください。

2023 年度

新潟青陵大学短期大学部

学校推薦型選抜・特別選抜試験・学園内特別推薦入試試験問題
「小論文」

試験の受け方について

- 1 試験開始の合図があるまでは、この問題用紙には手を触れないでください。
- 2 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- 3 試験時間は 90 分です。
- 4 印刷が不明瞭な場合のほかは、問題について質問は受けません。
- 5 試験終了時に解答用紙を提出してください。
- 6 試験終了時に問題用紙と下書き用紙はお持ち帰りください。
- 7 不正な行為があった場合は、解答はすべて無効となります。

この問題文は、中学三年生の時に親の転勤でインドのインターナショナル・スクールに入学した筆者が、ラトウナという転入生が自分の褐色の肌に対して「居心地悪い」と発言したことについて書いたものである。

- 一 問題文の要旨を三十字以内でまとめなさい（句読点を含む）。
- 二 問題文についてのあなたの意見を五百字以上六百字以内で論じなさい（表記は原稿用紙の使い方に準ずる）。

日本の中学の陸上部時代、毎日練習前には必ず日焼け止めを塗りたくっていた。特に炎天下で汗だくになる練習の日には一度塗りでは済まない。部員同士で貸し借りしながら、数種類の日焼け止めを、念には念をと思いながら何層にも重ねていた。少しでも焼けてしまったときには「うわー、最悪……」とひどく後悔した。

陸上部員なら日焼けしないなんて無理だ、と簡単にあきらめられなかったのは、中学生ながらにして身につけてしまった、むしろ吸収してしまった、「白い肌への執着」が原因だ。

ドラッグストアに行けば広い日焼け止めコーナーがあり、「これで日焼けもこわくない」「絶対に焼かないために」と蛍光色で彩られたポップが掲げられていた。まるで日焼けが恐ろしいものかのように。雑誌の表紙には、「理想の白肌美人への5ステップ」などという見出しが、マシユマロのように白い肌のモデルさんのアップ写真の横で躍っていた。動画サイトを開けば、肌が白くなったというビフォーアフターの写真とともに、「肌を白くする方法」とデカデカとしたフォントで記されたサムネイルの動画が、数百万回も再生されていた。

そうして、日々さまざまな場所で巧みに練られたことばたちに囲まれて、いつの間にか「白さが絶対」という価値観が染みついていった。現に、インドに引越すときには大量の日焼け止めを買い込んで、わざわざ日本から持ってきた。「インドに行つて黒くなつたらどうしよう」と思っていた。

その結果、インターに来てみたら「白人」であるはずのアメリカ人やヨーロッパ人よりも、アジア人の自分や、似たような価値観の渦中で生きてきたらしい韓国人のほうが「白い」という皮肉な事実に向面した。

白い肌＝女子力。白い肌＝かわいい。それが（特に学生や若い世代のあいだで）暗黙の了解になりすぎていて、そのゴールに近づくことで、わたしは「心地良さ」を手に入れようとしてきたのかもしれない。

でも、考えてみれば不思議だ。だいたい、「美白」ということばがあつて、なぜ「美黒」がないのか。なぜ「みんなの理想」を象徴するアイドルは、日焼けしてはいけないのか。なぜ白い肌だけが「みんなの理想」として自動設定されているのだろうか。そしてなぜ、その脳内の設定を解除するのはこんなにも難しいのだろうか。

明るい肌色の鬢^{ひら}、そして暗い肌色をネガティブにとらえる「カラーリズム」。このことばを日本で聞いたことはなかった。けれど、知らぬ間に自分も似たような引力に影響されてきたのかもしれない。

白い肌を目指すこと自体が悪いことなのではないんだろうけど、それを絶対的な「かわいさ」「美しさ」（ましてや「偉さ」）のものさしだと思つてしまつたら。まわりのひとのこと、そのものさしで測るようになってしまつたら。そして、それが社会全体のものさしになってしまつたら……。

大げさにとらえずさだろうか。けれど、ラトウナの悩みを知つてしまつてからというもの、気づかぬ間に社会に投影されてきた「基準」がもつ刃の鋭さが、こわくなつてしまつた。自分自身も、そんな社会の一端であり、無意識にその刃を研いでいるかもしれないということも。

肌色が暗いというラトウナがかわいそうなわけでは決してない。が、彼女の肌にはあつてわたしやほかの誰の肌にもない美しさを、彼女自身が「美しい」と呼べないのは苦しい。春の息吹のようなやさしさと、燦然^{さんぜん}とした太陽のエネルギの両方を帯びたラトウナの肌を、わたしは心からきれいだなと思うからだ。

ラトウナに限らず、わたしも、誰も、自分の生まれた肌色を心地良いと思えたらな。

だって「はだいろ」なんて色鉛筆のあの一色だけではないのだから。そして「はだいろ」だけで、その皮膚の下に眠る心のあたかさが決まるなんてことは絶対にはずだ。どんな色鉛筆や絵の具を組み合わせてもかたちにすることもできないような、目に見える色なんでものだけでは表しきれないような、彩り。それこそがひとりひとりの心であつて、肌色のちがうラトウナとわたしの友情をつないでくれたものなんじゃないのかな。

インドという異国の地で、いざ自分が端からまわりとまったくちがうという状況に放り込まれてみて、自分がいままでどれだけ周りとの「ちがいが」に過敏だったか、そしてそれを恐れてきたかを思い知らされた気がした。

だけど、本来「ちがいが」は許されるべきものではなくて尊重するべきものだという理解が、「みんなちがつてみんないい」ということばの真の重みでありあたかみなんじやないのかな。

2022 年度

新潟青陵大学短期大学部

学校推薦型選抜・特別選抜試験・学園内特別推薦入試試験問題
「小論文」

試験の受け方について

- 1 試験開始の合図があるまでは、この問題用紙には手を触れないでください。
- 2 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- 3 試験時間は 90 分です。
- 4 印刷が不明瞭な場合のほかは、問題について質問は受けません。
- 5 試験終了時に解答用紙を提出してください。
- 6 試験終了時に問題用紙と下書き用紙はお持ち帰りください。
- 7 不正な行為があった場合は、解答はすべて無効となります。

二〇二二年度 新潟青陵大学短期大学部入学試験
「学校推薦型選抜」 「特別選抜試験」 「学園内特別推薦入試」 小論文問題

- 一 問題文の要旨を三十文字以内でまとめなさい（句読点を含む）。
- 二 問題文についてのあなたの意見を五百字以上六百字以内で論じなさい（表記は原稿用紙の使い方に準ずる）。

大学に入学してきたばかりの大学1年生に、わたしはよくこんな話もしています。

高校時代までは、「やばい」とか「エモい」とか言っていれば、仲間内でコミュニケーションができたかもしれない。でも、大学生になったり、社会人になったりすれば、もうそれは通用しないのだと。

この社会には、世代も文化も、価値観も感受性も、自分とはまったく異なる人たちがたくさんいます。社会に出れば、多くの人は、そんな多様な人たちとのコミュニケーションの場いやおうに否応なく投げ出されます。

それはつまり、ただ「やばい」とか「エモい」とか言うのではなく、何がどう「やばい」のか、「エモい」のか、言葉を尽くして伝えられるようになる必要があるということです。

いや、それは本当は、小中学生の頃から大事なことです。

何か言いたいことがあっても、それがうまく言葉にならないことにイライラした経験は、多くの人が持っているのではないかと思います。

だれかとのいざこざや喧嘩けんかの際、それは特に大きな問題をもたらしてしまうことがあります。お互いに、言葉を尽くして話し合えば理解し合えたかもしれない、落としどころを見つけられたかもしれないのに、その「言葉」が見つからないために、イライラしてつい暴力や安易な暴言などに訴うったえてしまうことがあるのです。小さな子どもが癩癩かんしゃくを起こして暴れ回るのは、多くの場合、イライラを言葉にして言い表すことができないからです。

逆に言えば、もしわたしたちが十分な言葉を持っていたなら、異なる他者との間に、より深い了解関係を築ける可能性が格段に高まるということなのです。

そのためにも、わたしたちは「言葉をためる」必要があります。自分の考えを、また感情を、もつとも的確な言葉に乗せて伝えられるように、たくさん言葉を知る必要があるのです。

2021 年度

新潟青陵大学短期大学部

学校推薦型選抜・特別選抜試験・学園内特別推薦入試試験問題
「小論文」

試験の受け方について

- 1 試験開始の合図があるまでは、この問題用紙には手を触れないでください。
- 2 解答はすべて解答用紙に記入してください。
- 3 試験時間は 90 分です。
- 4 印刷が不明瞭な場合のほかは、問題について質問は受けません。
- 5 試験終了時に解答用紙を提出してください。
- 6 試験終了時に問題用紙と下書き用紙はお持ち帰りください。
- 7 不正な行為があった場合は、解答はすべて無効となります。

二〇二一年度 新潟青陵大学短期大学部入学試験
「学校推薦型選抜」「特別選抜試験」「学園内特別推薦入試」 小論文 問題

- 一 問題文の要旨を三十字以内でまとめなさい。
- 二 問題文についてのあなたの意見を五百字以上六百字以内で論じなさい。

以前に「アダルトチルドレン」という言葉がはやったことがありました(さいわい、もうあまり使われなくなりましたが)。親がアルコール依存症であったり、家庭内暴力をふるうような家庭に育った子どもは精神を病みがちであるという説です。それについて書かれた本を読んだら、そこに「アダルトチルドレンが発生する確率が高い家庭」の条件がいくつか挙げられていました。その一つに「家族の間に秘密がある」という項目がありました。

僕はそれを読んで、それは違うだろうと思いました。話は逆なんじゃないかな、と。

だって、家族の間に秘密があるなんて当たり前だからです。

家族といえども他の人には知られたくないあれこれの思いを心の奥底に抱え込んでいる。僕はそうでした。だから、僕は子どもの頃は親や兄に、結婚したあとは妻や子に、僕の「心の奥底」なんか覗かないで欲しいと思っていました。表面的に「演じている」ところだけでご勘弁下さい。だって、わざわざ心の奥底に隠しているわけですから、意馬心猿、社会的承認が得難いタイプの思念や感情に決まっています。別に、家族のみなさんに、それを受け入れてくれとか、承認してくれというような無理を申し上げるつもりはない。そつとしておいて欲しい。僕が求めているのはそれだけでした。ですから、もし「家族らしい思いやり」というものがあるとすれば、「この人は何となく『心の秘密』を隠していそうだな」と思ったら、その話は振らない、そつちには不用意に近づかないという気づかいのことじゃないかと思うんです。

もちろん、運がよければ、いずれどこかで、誰かに「これ、いままで誰にも言ったことがないことなんだけど……」ということを告白するときに来ます。そういう話を黙って聴いてくれる人が「親友」とか「恋人」とかいいうわけですから。

でも、それは一生に何度も起きることのない特権的な経験です。「親友」とだって、それからあと、顔を合わせる毎にそのつど「心の秘密」を打ち明け合うわけじゃないし、「恋人」と運よく結婚した場合でも、やっぱり朝夕ちやぶ台をはさんで「心の秘密」を語り合うわけじゃない。心の奥に秘めたことを語るといのは、例外的で、そしてとても幸福な経験であって、のべつ求めてよいものじゃない。僕はそう思います。

(中略)

どんなに親しい間柄でも、必ずどちらかが「何でそんなことを言うのかわからないこと」を言い出し、「何でそんなことをするのかわからないこと」をし始める。必ず。おとなしかった少女が、突然「もうたくさん。放つておいで」と捨て台詞を残して階段を駆け上がったり、優等生だったはずの少年が「オヤジのこと、ぶつころしてやりてえよ」と暗い目をしたたり……。そういうことって、ほんとうにいっぱいあるんです。ほぼすべての家庭でそれに類することが起きる。これは避けがたいことなんです。だから、「そういうことって、ある」という前提で話を始めた方がいい。

でも、なかなかそこまで心の準備ができないので、そういう場面に際会すると「親しいつもりだった家族」はびつくりしてしまいます。そして、傷つく。どうして、そんなことをして自分を傷つけるのか、理由がわからない。あまりに一方的だ、ひどすぎると思う。そこでバランスを取るために、自分も相手に同じだけの傷をつける権利があり、義務があると思うようになる……。

怖いですね。

でも、「そういうこと」が起きるのは、「家族はお互いに秘密を持たない方がいい」とか、「家族は心の底から理解し共感し合うべきだ」という前提から話を始めたからです。前提が間違っていたんです。

もちろん、「あるべき家族」について高い理想を掲げるのはいいことです。でも、「あるべき家族」のハードルを上げ過ぎて、結果的に家族がお互いをつねに「減点法」で採点して、眉根を寄せたり、舌打ちをしたりして過ごすのは、あまりよいことではありません。それよりは、家族の合格点をわりと低めに設定しておいて、「ああ、今日も合格点がとれた。善哉善哉」と安堵するという日々を送る方が精神衛生にも身体にもよいと思います。

でも、そういうことを声高に主張する人っていないんですね。ぜんぜんいないと言って過言でなくらいに少ない。どうしてなんでしょうね。

注：意馬心猿＝心に起る欲望や心の乱れを押しえることができないこと

内田樹・内田るん『街場の親子論 父と娘の困難なものごと』より

